

編集デスク <7>

阪大泌尿器の楠隆光教授の部屋へうかがうたびに感心することが一つある。それは、きちんと整備された文献箱である。15列5行、すなわち75の整理箱に、きちんと文献が整理して分類されていて気持がよい。中味は、文献名と、その抄録が、教授の手できれいに書き込まれたカードがつまっている。全部欧文である。いつから整理を始めたのかうかがってみると、昭和23年以来だという。教授は最近ちょっと病気をされたので、カードに書き抜かなければならない文献がたまったので、それを整理するのに忙しいと言っておられた。

楠教授は、原稿の締切を厳守するので有名である。必ず締切期日通りに送稿される。これはなかなかまねのできないことである。とかく、執筆者の中には、編集者泣かせが多く、承諾はしてもいざ原稿執筆となると、期日を守らないばかりでなく、そのために分担執筆の他の筆者

に迷惑を及ぼし、ひいては出版の計画にそごを来たし、出版社の損害を倍大させても、とんと意に介しないものもいる。その点、楠教授のように、締切期日を厳守する著者は編集者にとってはたいそうありがたいことである。

そのような楠教授の原稿締切期日の厳守の裏面には、ちゃんと整備された文献箱があるのであり、日々の

成るときに成るにあらず

長谷川 泉

努力と整理が、容易に執筆原稿のデータをそろえ得る因となっているのである。原稿は、原稿を執筆する日に成るのではなく、執筆にとりかかる前に、すでに成っているのである。

そのようにみずからを律すること厳でありきちんとしているから、編集者に対する要求もまたきびしい。ずぼらな編集者は、たちまち教授から叱りとばされてしまう。締切はき

ちんと守り、原稿はきれいだから、筆者としての弱みは寸毫もない。自然、編集者の方があられる結果になる。しかし、編集者にとっては、たとい叱られることがあっても、これは嬉しいことである。執筆者が、編集者に猫なで声を出すのは、締切におくれたとか、原稿が汚いとか、校正で直すとか、およそ執筆者の側に弱味があるからと見てよい。編集者にとっては、ありがたくない話である。

楠教授の文献箱のカードは、パンとしたパンチカードのような立派なものではない。洋罫紙を切って切れ目がささらになったところもある自製のものである。針を通して、いろいろの項目に整理できるようなものではない。しかし、教授も言うように、自分で全部作り、記したものであるから、どこに何があるか十分に見当がつき、立派なパンチカードに負けない働きをしている。死蔵された立派なパンチカードよりも、書き込みの1文字にいたるまで終始完全な自製の楠カードが貴重なゆえにある。

わってくるのじゃないかと思いますが、その点がまたおけているのです。

<看護婦も労働者である>

丸尾 看護婦も労働者である、と聞いてびっくりするような看護生がいるようでは、いい看護はできないと思うのです。人員が足りないから人員要求をすとか、賃金が低くて人間らしい生活ができないから、正当な賃金の要求をすとか、そういうことを問題にするような、いわゆる広い視野でものごとの考えられる看護婦というものを、教育していただきたいと思うのです。

野村 学生からアンケートみたいなのを取ったんですよ。看護婦は労働者であるかどうか。労働者でないとはいえませんが、完全な肉体労働者であるかどうかというと、多くの人はずうでないと答える。ひどい人になるとナイチンゲール精神がなくて、なぜこんな学校へきたのだという意見も出てきました。しかし大体において労働者であるけれども、やはり精神的な面を含んでいる、それがみんな意見でした。

丸尾 看護婦の精神的なものはよくわかります。深夜

の実習ということも、ボイコットしようとは考えておりません。しかし、いい看護をしようと思えば、ある程度闘ってかちとらなければならないと思うんです。ただ黙ってみれば弱いもののところへ、しわ寄せがくるんですから、私たちは考えていることを問題にして、それを主張できるだけの看護婦になりたいと思うのです。

長谷川 社会的な人間としてのナースだということだと思ふのですけれども。

加藤 私がいま一番ほしいのは考える時間だと思ひます。正しいか正しくないかということ、十分考えるだけの時間がほしいと思うです。

長谷川 それはやっぱり自主的な問題にまかされていることが多いような気がしますね。この辺で速記をとめますが、ここで論じられた問題は実習場に焦点を合わせて、今後の教育の方向をきめる重要な課題が含まれていたと思います。近く実現される見透しのものもあり、また看護界が一致協力して推進しないとむづかしい問題もあります。それらがプラスの方向で解決されることを望みます。